

中間評価と健康環境文化コース (第三期) における 社会人向けリカレント教育カリキュラム

鹿児島大学産学官連携推進機構 特任准教授 野村 卓
鹿児島大学生涯学習教育研究センター准教授 小栗 有子

はじめに

平成 18 年度文部科学省科学技術振興調整費「地域再生人材創出拠点の形成プログラム」に採択された、鹿児島大学かごしまルネッサンスアカデミー (KRA) は、事業開始 3 年目を迎えた平成 20 年 6 月に中間評価書を取りまとめ、委託元である文部科学省に提出した。同年 10 月に中間評価に関するヒアリングが行われ、その結果が 12 月に公表された。本稿は、文科省に提出した中間評価の内容について、健康環境文化コースに関係する部分を中心に再掲するとともに、その評価結果を受けて、当コースとして実施したカリキュラムの改善内容と課題について報告する。

第 1 章 鹿児島大学かごしまルネッサンスアカデミー中間評価 (平成 20 年 6 月提出分)

1 拠点形成の成果

(1) 拠点形成計画の進捗状況の概要

発酵・醸造業を中心とする食産業は鹿児島県の製造業の中心的位置を占めている。本事業は、伝統と地域の特性を生かした発酵・醸造業を支える技能に科学的、文化的な側面の裏づけを与え、それらを世界へ向けて発信し鹿児島ブランドを確立できる人材、さらにブランド力を高めるための経営センスを有する人材を育成し、地域の再生に資することを目的とする。本事業では地域の人材育成のための組織として「かごしまルネッサンスアカデミー」を鹿児島大学産学官連携推進機構に設置し、①食の安全管理コース、②経営管理コース、③健康・環境・文化コースの 3 つの教育コースを設定した。

平成 18 年 5 月に本プログラムが採択された後、同年 9 月に「かごしまルネッサンスアカデミー運営実施

要項」を定め、本アカデミー運営の意志決定機関としての管理会議 (第 1 回) を開催し、アカデミーの構成員、管理会議委員の任命、カリキュラム (時間割)、受講生募集及びプロジェクト研究員等の採用について検討し、現行の実施体制を整えた。

教育体制と運営については以下のとおりである。なお、「かごしまルネッサンスアカデミー」の教育年度は、10 月開講、翌年の 9 月修了としており、従って平成 18 ～ 19 年度に第一期生を輩出し、中間評価時は第二期生が在学中であった (平成 20 年度の時点)。

① 被養成者の選考状況／結果

第一期は 3 コースで 50 名の定員に対して計 50 名の受講申請があり、選考資料の履歴書と希望理由書により管理会議にて厳選な評価を行った結果、受講申請者全員を受け入れた。第二期は計 62 名の受講申請があり、慎重な選考の結果、受講申請者全員を受け入れた。

② カリキュラム等の整備状況／結果

本事業開始前に、関連する業界や鹿児島県と打合せて、食産業に従事する者にとって重要な生産技術及び経営技術を抽出した。また、東京農業大学の小泉武夫教授等の識者等との議論や示唆により、鹿児島の食とそれを生み出した歴史や自然などについて、コアとなる要素を抽出し、すべてを編み上げるにより 3 コースのカリキュラムを作成した。第一期の実施に当たり、各コースとも受講生の声を反映させながら、内容を修正した。第一期修了時には各コースとも受講生にアンケートを行い、第二期のカリキュラム作成の際の重要な指針とした。

最終的に、第二期の開始前に「食の安全管理コース」では必修 72 コマ (165 時間)、「健康・環境・文化コース」24 コマ (36 時間) の合計 96 コマ (201 時間)

を修了要件とし（本コースの講義は1コマ1.5時間、実験・実習は3時間としている）、「経営管理コース」では必修科目70コマ（105時間）、選択科目6コマ（9時間）、「健康・環境・文化コース」24コマ（36時間）の合計100コマ（150時間）、また「健康・環境・文化コース」では必修クラス24コマ（36時間）、選択クラス102コマ（153時間）の、合計126コマ（189時間）のうち74コマの習得を修了要件とするカリキュラムを作り上げた（表8）。

本アカデミーのカリキュラムの特徴は、「食の安全管理コース」と「経営管理コース」の受講生が「健康・環境・文化コース」の科目を受講することであり、これにより生産に携わる技術者、経営に携わる者、そして消費者・サポーターが同じ場で学習・議論することが可能になり、相互理解が得られることを意図した。さらに、既修了生には聴講のスペースが許す限り未受講科目の翌年度以降も聴講することを認めており、自己研鑽の機会を提供した。

表8 「かごしまルネッサンスアカデミー」第一期の修了要件一覧

コース名	必修科目	選択科目	修了要件
食の安全管理コース	72コマ (165時間)	健康・環境・文化コースの24コマ (36時間)	96コマ (201時間)
経営管理コース	70コマ (105時間)	6コマ(9時間) 健康・環境・文化コースの24コマ (36時間)	100コマ (150時間)
健康・環境・文化コース	24コマ	102コマ	126コマ(189時間)のうち74コマの修得

③ 履修状況／結果

「食の安全管理コース」では第一期 受講生11名中8名が修了した。1名は必修科目欠席のため未修了であり、第二期に継続受講中である。残りの2名は退職により受講継続が不可能になり、退学せざるを得なかった。第二期は受講を受け入れた12名と継続受講生1名が履修中である。

「経営管理コース」では、第一期は受講生10名中8名が修了した。2名がやはり退職により退学した。第二期では受講を受け入れた15名が履修中である。

「健康・環境・文化コース」では、第一期生は32名中31名が修了した。1名は県外への転勤により受講が不可能になったものである。第二期生は、入学が許可された34名が受講している。

④ 実施体制（教員等の陣容）等の実施状況／結果

「かごしまルネッサンスアカデミー」は、鹿児島大学長をアカデミー長としている。アカデミーの最高運営機関は、管理会議である。日常業務の事務的業務は産学官連携推進機構管理部門が担当し、教務関係の業務は各コースのコース長と特任教員からなる実務者会議で決定・実施している。

教員は、学際領域に対応するため、本学の法文学

部、教育学部、理学部、農学部、水産学部及び大学院歯学総合研究科など全学的な支援と協力のもと実施している。学外の非常勤講師は各界のエキスパートに依頼しているが、鹿児島県からは特定の分野で必要とする講師が派遣されている。「食の安全管理コース」では2名が、それぞれ現場の実践的な焼酎等の分析技術、微生物の取扱い法を、「健康・環境・文化コース」では、鹿児島県から前保健福祉部長が「かごしまの長寿と健康」に関する講義を担当した。コース別にみると、学外からは「食の安全管理コース」では、講師8名を招聘、「経営管理コース」では16名、「健康・環境・文化コース」では20名の講師を招聘した。

各科目クラスは、科目担当講師、コース責任者、実務者によって、クラス内容の構成と日程の編成が行われている。これによって講義内容等の重複は発生せず、効率的な科目運営ができています。このようなきめの細かい運営体制等から受講生へのアンケート結果も高い満足度を得た。

⑤ 養成修了生及びその到達レベル等に関する計画の達成状況／結果

「食の安全管理コース」の第一期受講生11名が、

科目内容によるそれぞれの到達目標に対しての学習成績評価を各科目担当者により受け8名が修了した。1名は必修科目を勤務時間の関係から履修することができず不合格となったが、第2期への継続受講が認められている。2名は勤務の都合で退学した。本コースの修了生のうち2名が、さらに高度な勉学を求めて本学大学院農学研究科に社会人入学できたが、本コースにおける修了者のレベルアップの好例と言える。

「経営管理コース」では第一期は、10名中、退職した2名を除く8名が修了した。

「健康・環境・文化コース」では第一期は、県外転勤者1名を除き、31名が修了した。

以上のように各コースで修了生は到達すべき目標に対して満足すべき成績を得たと判断される。

- ⑥ 養成修了生の当該当地域における活躍状況／結果
多くの受講生は、本事業で教授される内容と密接に関係した職に従事している者が選抜されていることから、本事業で修得した知識・技術は職場や地域において直ちに活用され、地域で活躍できる。

特筆すべき例では、「食の安全管理コース」の第一期生のうち2名が大学院に進学し、さらに高度な知識・技術を学んでおり、新規焼酎用酵母の分離とそれを使った商品開発にも成功している。また、「経営管理コース」の修了生にも、新規商品のコンセプトを提案し、商品化に結び付けた例がある。

また、既修了生が講師や実技等の支援者として本アカデミー内部でも活躍できる場を設けており、さらに修了生の同窓会組織が発足したことから、受講生の幅広いネットワークが形成され始めている。このような自発的なネットワークが将来の地域再生の拠点となることが多いに期待できた。

2 中間目標の達成度

(1) 養成人数以外（拠点形成）の中間目標と実績

本事業は、単年度の計画の積み重ねであり、従って受講者及び修了者数以外の中間目標は事業計画・申請段階では想定していなかった。しかしながら、本事業を実施していく上で、日頃の様々な工夫と努力から生まれた以下のような事項を実績として挙げる事ができた。

- ・醸造・発酵関連の食産業に従事する技術者、および経営に関わる者に対するリカレント教育のためのカリキュラムを提示することができ、これは類似の産業を持つ他の地域の関係者に対しても大きな変更なしに適用することが期待できた。

- ・効率よく講義を展開するために必要な予習・復習のためのオンライン教材を作りだし、提供することができた。

- ・修了生のための同窓会が発足した。今後の地域再生活動のための拠点として活用できる。

(2) 養成人数の目標と実績 （3年目）

表9 養成人数の目標と実績

人材養成のカテゴリー (コース等)	養成修了生数（3年目）		目標（3年目）
	実 績	予 定	
・食の安全管理コース	8 人	(21 人)	20 人
・経営管理コース	8 人	(23 人)	20 人
・健康・環境・文化コース	31 人	(65 人)	60 人

※「実績」は、成果報告書作成時点で既に修了している実績数（予定は含まない）

※「予定」は、成果報告書作成時点では修了していないが、3年度目末までに修了する予定数（平成20年度時点の見解）

これまでの修了生及び現在の受講生の職種の内訳は以下のとおりである。第一期、第二期とも鹿児島県内の発酵・

醸造会社の技術者や管理職、自治体の議員や職員及び観光・飲食業関係者など様々な分野から受講生を受け入れた。

表10 第一期（H18.10～H19.9）修了状況

（単位：人）

受講生の業種等	食の安全管理 コース	経営管理 コース	健康・環境・文化 コース	計
酒造・醸造会社	8	6	11	25
I T 企 業		1		1
設 備 会 社		1		1
公 務 員			3	3
観 光 ・ 飲 食 業			5	5
個 人 事 業 者			3	3
そ の 他			9	9
計	8	8	31	47

※定員 50 名（食の安全管理コース：10，経営管理コース：10，健康・環境・文化コース：30）

表11 第二期（H19.10～H20.9）修了状況

（単位：人）

受講生の業種等	食の安全管理 コース	経営管理 コース	健康・環境・文化 コース	計
酒造・醸造会社	12*	5	7	24
公 務 員			4	4
観 光 ・ 飲 食 業 サ ー ビ ス 業		2	9	11
個 人 事 業 者			3	3
教 育 関 係 者	1	3		4
そ の 他		5	11	16
計	13*	15	34	62

* 第一期の継続受講生 1 名を含む。

※定員 50 名（食の安全管理コース：10，経営管理コース：10，健康・環境・文化コース：30）

3 人材養成の実施内容

(1) 人材養成の手法・方法と実施結果

表12 人材養成の経過

実施期間（実施日）	取 組 名
平成 18 年 5 月 18 日	本事業採択
平成 18 年 9 月 4 日	「かごしまルネッサンスアカデミー運営実施要項」 学長裁定
18 年 9 月 6 日	第 1 回かごしまルネッサンスアカデミー管理会議 開催 (カリキュラム及び募集要項の作成, プロジェクト研究員の採用)
18 年 9 月 25 日 ～ 10 月 10 日	第 1 期受講生 募集
18 年 11 月 7 日	第 2 回かごしまルネッサンスアカデミー管理会議 開催 (入学者の決定)
18 年 11 月 12 日	第 1 期開講式, 健康・環境・文化コース講義開始
18 年 11 月 18 日	経営管理コース講義開始
19 年 2 月 5 日	食の安全管理コース講義開始
19 年 8 月 1 日 ～ 8 月 31 日	第 2 期受講生 募集
19 年 8 月 11 日	平成 18 年度事業報告会・第 2 期受講生募集説明会実施
19 年 9 月 12 日	第 8 回かごしまルネッサンスアカデミー管理会議 開催 (修了成績判定, 入学者の決定)
19 年 9 月 29 日	第 1 期修了式
19 年 10 月 13 日	第 2 期開講式, 健康・環境・文化コース講義開始
19 年 11 月 17 日	経営管理コース講義開始
20 年 5 月 19 日	食の安全管理コース講義開始

「かごしまルネッサンスアカデミー」は、発酵・醸造産業を中心とする食産業に従事する技術者を養成する「食の安全管理コース」、それら企業の経営に携わる者を対象とする「経営管理コース」、また鹿児島の様々な魅力を発信し、地域を活性化する、鹿児島のサポーターともいえる人材を養成する「健康・環境・文化コース」の3コースが設定されている。これらのカリキュラムの特徴の一つは「食の安全管理コース」と「経営管理コース」の受講生は、必ず「健康・環境・文化コース」中に設定されるいくつかの科目を受講する必要があることである。鹿児島の食を生産する技術者、企業経営者、そして情報を発信するサポーターが共通の場において鹿児島の魅力、すなわち歴史、環境、文化や様々な醸造技術などをともに学び、議論し、情報を共有することを意図している。各コースについては以下に詳細に記述する。なお、「かごしまルネッサンスアカデミー」は10月に開講し、翌年の9月に修了する学年暦を採用している。

【健康・環境・文化コース】のみを抜粋

① 取組内容

歴史・文化、環境をはじめ健康・長寿の基礎知識など、食を中心とした鹿児島の魅力を情報発信できる人材の養成をめざす。講義概要は以下のとおりであり、座学と現場実習の組み合わせが特徴であり、得た知識を総合化・情報発信できるための「修了課題」を課している。実習としては、県内の焼酎蔵の訪問、本県の代表的な郷土料理「酒ずし」の調理実習、大野 ESD 自然学校での地域教育実践の運営や地域活性化に取り組む現場訪問、県内の河川や干潟、本学所有の船舶による海底調査の環境実習など多様な取り組みを行っている。

I 地域再生論

世界的視野に立ち、経済、文化、環境の各視点から鹿児島の位置と課題を確認し、持続可能な社

会の基本的考え方を理解する。

II 焼酎・発酵産業の基礎

（第1期は焼酎・発酵学の基礎）

発酵メカニズムの基本を踏まえ、醸造・発酵食品の生産・流通・消費・廃棄にいたる特性と課題について理解する。

III 鹿児島県の文化と歴史

鹿児島県の醸造・発酵文化を支えてきた思想、言語、社会経済制度、生活技術の変遷、及びその意義について環アジア太平洋地域との関係で通史的に理解する。

IV 鹿児島県の食産業を支える自然環境

（第一期は鹿児島県の自然と環境）

鹿児島県の自然環境の特性と現状を科学的・実践的に理解した上で、鹿児島県の醸造・発酵産業を支える地域資源の持続的利用の原則と課題について理解する。

V 鹿児島県の健康と長寿

科学的な視点から鹿児島県の伝統的な食と環境、及び現代の食と環境が健康に及ぼす影響や問題について理解する。

VI 情報発信スキル

本コースで習得した知識を情報発信するために必要な各種スキルを身につけ、情報発信力を用いた地域再生の事業提案を行う。

上記の講義内容に対して以下（1）～（5）の項目を達成すべき点とする。

I～Vの科目は、知のInputを主眼にして編成されており、（1）鹿児島県が直面する過疎問題や環境問題について、座学の知識としてのみならず、現場の具体的な実情を理解し、それを自分の言葉で説明できること、（2）焼酎を中心とする鹿児島県の醸造・発酵産業の発展が、鹿児島県の風土によって支えられ、その上に生活文化が連綿と形成されてきたことを理解し、それを自分の言葉で説明できること、（3）さらに、昨今のグローバル化や国内外の社会構造の急激な変化の波が、鹿児島県の醸造・発酵産業、並びに、生活文化に大きな影響を与えていることを理解し、それを自分の言葉で説明できること、以上3点の到達を目指す。

一方、VIの科目は、知のOutputを主眼にして編成されており、（4）①～⑤の科目で習得した知識について、地域の課題と各自の問題関心に即して、情報発信力を生かして地域再生事業の提案（修了課題）ができること、（5）修了課題を通じて人的ネットワークを広げ、異分野の人・団体と連携していける力を獲得すること、以上2点の到達を目指す。

② 募集・選考方法

鹿児島県の魅力を情報発信することに意欲的な県内在住の社会人を募集の対象とした。受講希望者の業種、年齢等は実に幅広いものとなった。選考は受講申請時に提出された書類等をもとに行われた。

③ 選考結果

第一期は32人、第二期は34人の受講希望があり、全ての受講を受け入れた。

（2）養成対象者の到達度評価の仕組みと実施結果

3コース共通に講義・実習後レポートを提出し、習得した知識・スキルの判定を行った。「講義・実習の7割以上の理解ができているか」、「自分の意見を述べる事ができていないか」を各コース共通の判断基準とし、担当教員が可否を判定した。一部の講義では最終段階で考查試験を行っているものがあり、考查試験では、公的な資格審査基準に合わせているため7割以上の正答率で可否を判定した。

最終的には全員の成績は管理会議に諮られ、コース長の説明の下、管理会議での議決で修了の可否を決定する。修了判定が可の者には「修了証」を発行する。

本事業は社会人のリカレント教育の機会であるため、勤務の都合によって単位修得が進まず、一年間で修了できない場合がある。救済措置として、本人の勉学意欲が高く、また受講年度に6割以上の単位を修得していることを条件に、管理委員会が次年度への継続受講を認める仕組みを設けた。

【健康・環境・文化コース】のみを抜粋

受講生の到達度レベルは、知のInputに重点をおく①～⑤の科目については、必修科目である科目オリエンテーションの科目レポート、並びに、選択科目である各クラスのレポートを課し、担当講師による可否判定を行い、知識の習得状況を確認した。判定基準は、講義・実習の7割以上の理解度と内容を咀嚼し自分の考えを述べられているかの2点を設定した。

一方、知の Output に重点をおく⑥の科目については、各クラスのレポートを課し、担当講師による合否判定を行うと同時に、必修科目である修了課題を課し、その作成過程と成果の発表までを評価の対象とした。「修了課題」に取り組む過程には、地域調査やグループ討議、広報能力としてチラシ・パンフレット作成や記者クラブへの会見準備、協賛団体の呼びかけ等の様々な能力の活用が含まれる。

第一期生は、県外転勤者1名を除き、単位習得が行われ、31名が修了した。第一期生は、修了課題として、各自で地域再生の事業提案を作成し、商業施設を会場に修了課題発表会を行った。実施の結果としては、提案に基づいた事業がいくつか実現した（たとえば、地元鹿児島市郡山の地域遺産の掘り起こしと情報発信活動、鹿児島産の果物を使った焼酎リキュールの商品化、黒豚を使用したカレー店の開業など）。また、修了課題の取り組みが、同窓会設立の力にもなっており、第二期生や大学との連携のあり方を模索する流れにもつながった。

第二期生は、入学が許可された34名が現在も受講し、第二期より修了課題がグループでの取り組みとなり、現在6つのグループが、自治体や業界、NPOなどへ「事業提案」を行うべく、第一期修了生の支援も受けながら研鑽を積んだ。

(3) 人材養成システムの改善状況（被養成者の評価等の反映）

各コースのカリキュラムは、本事業開始前に産業界からの要望を聞き、県の担当者らとの意見交換を重ねて作成したもので、そのままで十分に教育効果があるものと自負していたが、初年度の受講生に対して講義・実習後にアンケートを実施し、それに基づいてカリキュラムを、より改善するとともに、個別の講義担当者の講義方法の改善に役立てた。

第二期における具体的なカリキュラムの改善としては、以下のものが挙げられる。

【健康・環境・文化コース】のみを抜粋

カリキュラムを構成する6つの科目クラスを再編し、科目オリエンテーションの導入、修了課題の重点化、必修・選択科目再編、必修科目の放送教材化を図った。また、修了課題の重点化の過程において、修了生と受講生が連携して取り組める機会を模索している。

第二期では、第一期修了生が3コース全体の成果発表を支援することも計画され、これら参画の機会を既修了生に開くことによって、さまざまなノウハウが本事業に活用され、結果として地域ニーズが容易に取り込まれ、カリキュラムに反映しやすくなる利点があった。

(4) 養成修了人材が地域で活躍する仕組み

多くの受講生、特に「食の安全管理コース」と「経営管理コース」受講生は、本事業で教授される内容と密接に関係した職の者が選抜された。本事業で修得した知識、技術は職場において直ちに活用され、これら生産活動を通じて地域で活躍できる。

「健康・環境・文化コース」でも企業在職者から県内で市民活動を行う団体に所属する者が受講生となっており、実現可能性の高い地域課題に取り組むことによって、地域再生のための力量が形成された。

さらに、既修了生は、以後の修了課題に参画し、発表会での支援を行うことによって、本事業において受講生同士の縦と横の連携が図れ、この連携が社会貢献のための拠点となった。

4 地域再生人材養成ユニットの有効性

(1) 有用性

本事業は、県内の重要な製造業である食品製造、特に発酵・醸造産業に従事する技術者、経営者等のリカレント教育を目指している。受講生は職場において本事業内容が必要と感じ受講しており、本事業で修得したことはただちに職場において実践される。従って、本事業の有用性は極めて高い。

【健康・環境・文化コース】のみを抜粋

HEC コースの受講生は、醸造・発酵産業の従事者のほか、県内の多様なバックグラウンドと潜在力を有する人材であり、これら人材が有機的な人的ネットワークを構築し、新たな事業展開がなされていくところに有効性が認められた。具体的には、情報発信スキル習得の一環として組み込まれている修了課題を経験することによって、3つの事業が地域や企業で実践展開されている。また、第二期生の修了課題において、第一期修了生と連携して実践の展開が行われるようになった。

HEC コースが提供する知識は、鹿児島の発酵・醸造産業を支える風土や文化を裏付けるものであり、営業先で焼酎の話だけでなく、薩摩焼の器の話やサツマイモの歴史の話がで

きるようになったと評価する声を直接聞く。また、受講生が、講義や実習の資料を社内で閲覧したり、社内報に記事を掲載するなど、社内への情報還元も積極的におこなわれている。技術者や経営者に限らず、広く営業職やサービス業従事者が職務ですぐ活用できている点に有用性が認められた。

(2) 波及効果

前述したような本事業の成果は、似た産業構成の他地域にも必修科目などを置き換えるだけで、基本的に大きな変更なく直ちに適用できると考えられる。具体的には、以下のものが生み出された。

- ・発酵・醸造関連の食産業に従事する技術者、および経営に関わる者に対するリカレント教育のためのカリキュラムを提示することができた。これは、類似の産業を持つ地域に大きな変更なしに適用することができる。
- ・効率よく講義を展開するために必要な予習・復習のためのオンライン教材を作りだし、提供することができた。
- ・修了生のための同窓会が発足した。今後の地域再生活動のための拠点として活用できる。
- ・既修了生には聴講のスペースが許す限り、未受講の科目を翌年度以降も聴講することを認めており、自己研鑽の機会を提供している。

教材面を詳細に述べると、経営管理コースでは稲盛アカデミーと本事業との連携科目である「実践経営論」を

放送教材とし、更にその講義を整文化し、テキスト化も試みた。これら教材は、年度後半の会計クラスの学習用並びに、補講用として利用できるようになっている。HEC コースでは、必修科目に限り、インターネットでの視聴ができるようになっている。このような講義・実習科目のテキスト化やオンライン化は、受講生の負担を減らし、理解を深め、かつ学習意欲を高めていく上で重要である。現段階では、放送教材の質の問題（音や画像）はあるものの、今後のインフラ整備により改善できる。本事業の受講生は鹿児島大学に所属する学生としてID、パスワードが発行され、大学内のIT 機器が自在に利用でき、図書館の利用も自由である。

このように講義・実習の放送教材化の促進と受講資料のテキスト化、IT 機器や大学の施設の自由な使用等は他の地域でも導入しやすく、学習の促進からも参考になるものと考えられた。

(3) 情報発信の状況

新聞や県内の広報誌に本アカデミーの活動内容が紹介されている。全国的には、平成 19 年 10 月 26 日発行の『イオンマガジン 22 号』に掲載されたことにより、国内の一般市民へ本アカデミーについて情報発信することができた。

さらに、テレビでは南日本放送『ふるさとかごしま』（平成 19 年 8 月 4 日放送）にて本学「焼酎学講座」及び本アカデミーの取組が紹介された。



**焼酎技術学び報告
鹿大社会人講座**

焼酎などの発酵醸造関連産業の製造技術や品質管理を鹿児島大学などの専門家が学ぶ社会人向け講座「かごしまリカレントアカデミー」(アカデミー長・吉田浩己鹿児島大学長)の二〇〇六年度事業報告会が十一日、鹿児島市の同大であった。写真「食の安全管理」経営管理「健康・環境・文化」の三コースの専任講師が、この日の講座で、受講生に、食の安全管理の重要性を説明した。

受講者からは「仕事と両立が大変だが最先端のことを学べた」といった声があり、焼酎メーカー勤務者が多い食の安全管理コースで知的財産管理や微生物の取り扱いなどを学んだ受講者は「日常業務として行っていることを基礎から学べた。自分が社内講師となり職場での横の展開もできた」と成果を語った。

第二期生
(〇七年十月
一〇八年九月
月)の募集期
間は八月三十
日まで。受
講は無料。同
アカデミー事
務局 〇九
(285) 3
229。

【平成 18 年度事業報告&第二期受講生募集説明会 (平成 19 年 8 月 11 日 (土) 鹿児島大学稲盛会館)】

鹿児島県内の食産業関連企業関係者、地方公共団体職員、一般市民、学内関係者等を対象に初年度の事業報告、基調講演、パネルディスカッションを行い、多くの方々に本事業の趣旨を理解してもらう機会となった。また、次期受講生募集のための説明も併せて行った。参加人数 101 名 (図 37)。

焼酎で地域活性化を

「ルネッサンス」一 期生
鹿児島市で修了発表会

焼酎を中心に鹿児島の文化、歴史、自然などを学ぶ、鹿児島大学「かごしまルネッサンスアカデミー」の「健康・環境・文化コース」一 期生による修了課題発表会が二十五日、鹿児島市のドルフィンポートであった。受講生約三十人が、焼酎や食などを生かした地域活性化プランを披露した。受講生らは、焼酎と地



学んだ成果として地域活性化プランを発表する受講生
＝25日、鹿児島市本港新町のドルフィンポート

いなどと呼び掛けた。島大が県などと連携して、食を柱に地域再生を

担う人材を育てようと二〇〇六年十一月に開講。同コースのほか「食の安全管理コース」「経営管理コース」の計三コースで、さまざまな年代、職業の社会人が学んだ。現在、十月に開講する二期生を募集している。

【健康・環境・文化コース第一期生修了課題発表会
（平成 19 年 8 月 25 日（土） 鹿児島市・山形屋
ドルフィンホール）】

「健康・環境・文化コース」第一期生 31 名が、一年間の学びの成果として、社会に向けた具体的なプロジェクトを発信した。受講生が活動分野や興味関心に応じて、受講生 31 名が銘々、「私たちの地域再生プロジェクト」をテーマに企画書を作成し、プレゼンテーションを行った。併せて、コース及びアカデミーの活動の紹介も行った（図 38）。

また、定期的に鹿児島県の担当者と本アカデ

ミーの実務者が会して、意見交換をし、相互に情報の共有を図っている。

5 実施体制・自治体等との連携状況

発酵・醸造製品を始めとする食品産業は、鹿児島県の製造業における最も重要な分野の一つであり、鹿児島県の産業界、県・市町村、および鹿児島大学が従来から重視しているところである。平成 18 年度に酒造組合と鹿児島県の寄附により、鹿児島大学に「焼酎学講座」焼酎学講座が設置され、これを機に県内の発酵・醸造に関わる社会人に対してのリカレント教育の必要性が模索されており、本事業への提案へと結びついている。それらの過程を踏まえて、「かごしまルネッサンスアカデミー」のカリキュラムについては鹿児島県、酒造組合と打合せをし、また酒造会社の技術系職員にはどのような技術の教育が良いかのアンケートも事前になされて、カリキュラム作成の柱とした。

さらに、実際の運営にあたっては鹿児島県から講師が派遣され、「食の安全管理コース」では鹿児島県より講師 2 名が派遣されている。具体的には焼酎等の分析技術ではもろみ・麹の分析技術の講義と実験実習の指導を、微生物の取扱い法では現場の病原性微生物の対処法、知識に関して講義を分担願っている。「健康・環境・文化コース」では、鹿児島県から前保健福祉部長の要職にあった方に「かごしまの長寿と健康」に関する講義を分担願っているほか鹿児島県より講師が派遣されており、受講生から高い評価を受けている。

また、講習に合わせて最適な講義のための場所が提供されるとともに、第一期からのカリキュラムの研究会に鹿児島県職員も参加し、自治体からの意見や要望をカリキュラムに反映している。

現在、「健康・環境・文化コース」では第二期生において、県職員 2 名、市職員 1 名、市議会議員 1 名が受講生として受講している。これらのことは、自治体等公的機関の職員研修の機会としての可能性を示した。

以上のように各コースのカリキュラムの作成及び各コースにおける実際の講師として、鹿児島県職員との緊密な連携と協力のもとに本事業を実施した。

6 本養成プログラム終了時の達成目標について

① 目標達成の見込み

本事業は、地域の再生に資する人材の教育が主目的であり、育成人数の面では当初計画通りに進捗させた。

【健康・環境・文化コース】

計画では5年間で150名の人材養成を目標にしている。基本的には毎年30名程度の受講生の受け入れ傾向が維持できれば、人数的な目標が達成できる。

地域再生のための人材養成を念頭に置いたカリキュラムの研究・調査の成果としては、修了課題の重点的な取り組みをとおして、カリキュラムのあり方と事業体制についての大まかな指針を得ることができた。今後、受講生と修了生のネットワークの強化をはかり、同窓会等との連携を図っていくことで、修了生が情報発信の担い手や地域における人材育成のリーダーとして継続して活躍できる仕組みを作ることができる。

さらに、鹿児島県や焼酎・発酵食品メーカーとの連携を強化し、受講生の直接指導にあたる講師枠の拡大を図る。大学を拠点にして、県や企業等と受講生が直接交流する機会を増やすことをとおして、産学官連携による人材養成の効果を高めることが期待できる。

② 本プログラム終了後の取り組み方針・見通し

鹿児島大学が「知の拠点」として担うべきことの一つは、地域で活躍し得る人材を養成し、輩出することにより地域社会に貢献することであり、これは大学憲章にも謳われているように地域に根ざした大学としての使命である。「かごしまルネッサンスアカデミー」はこれまで述べてきたように鹿児島県の食産業を中心とした地域および地域産業の活性化に貢献できることは明らかであり、本事業の継続は地域の再生に重要である。

さて、本事業は鹿児島大学を中心として鹿児島県と鹿児島県酒造組合の協力の下に運営されている。また、本アカデミーの教育は3コースに分かれており、各コースは十分な連携をとりつつ、それぞれの目標に沿った教育を行っている。従って、事業終了後の本アカデミーの継続は学外の鹿児島県と酒造組

合、および諸団体、学内にあっては、寄附講座「焼酎学講座」、稲盛アカデミー、生涯学習教育研究センターなどの組織が協力しながら運営にあたる必要がある。本組織を継続するためには、まず学内の3組織とその母体である学部が協議をし、存続のための組織を作り、全学で賛同を得る必要がある。このための組織作成の準備作業は、本アカデミー長である学長の指揮によりアカデミー内に企画会議を設けてすでに準備を始めている。本年度中に組織のあらましについて検討し、来年度早々から県、酒造組合等を交えてさらに資金計画、教育体制について詳細な検討を始めるなど、本アカデミーの継続についての検討を本格化することとしている。

農産物を利用した発酵、醸造は鹿児島県以外にも九州全土で重視されている産業であり、全国で唯一の焼酎学講座を持ち学生教育にあたっている鹿児島大学は、九州全域の焼酎を中心とする産業界の人材を受け入れて育成するためにも、「かごしまルネッサンスアカデミー」を継続、発展させる必要がある。

7 自己評価

(1) 進捗状況

本事業では、「食の安全管理コース」、「経営管理コース」、および「健康・環境・文化コース」が連携をとりながら地域再生人材を育成しているが、すべての事業が当初の計画通りに進捗している。

【健康・環境・文化コース】のみを抜粋

第一期生および第二期生ともに、県や業界関係者を交えたカリキュラム研究会の成果や受講生の声をカリキュラム内容や方法の充実にいかし、その結果受講生のアンケート調査の結果より高い満足度を得た。

特に、情報発信力を地域再生につなげる目的で配置する修了課題については、第一期生が個人で取り組んだことに対し、第二期生からはグループで取り組むことにより、地域のリーダーとしての力量を高め、自治体や企業、地元団体等と実際に連携する兆しが表れた。

このグループでの取り組みは、受講生が教養や経験を講義・実習によって深めながらも、地域を再生できる人材として力量形成していくために、

集団での合意形成や地域課題への具体的で実現性の高い事業提案能力を養っていくには重要な過程と評価した。また、講義・実習の内容や進め方等についても一方的な講義ではなく意見交換を行う手法を導入したことによって受講生の学習意欲も高まり、満足度を向上させた。

以上のことから、本コースは計画通りに順調に進捗していると評価した。

(2) 拠点形成手法の妥当性

地域の特産品をブランド化するためには、安定した経営技術に支えられた企業が、高品質の商品を安定供給することだけでは十分でなく、その商品を広めるリピーター、サポーター群が必要である。「かごしまルネッサンスアカデミー」では、商品の品質にかかわる部分を「食の安全管理コース」で、経営に関する部分を「経営管理コース」で受け持ち、さらに技術や経営に携わるメンバーと消費者の視点を持つものが「環境・健康・文化コース」で、鹿児島の自然、歴史、文化などの様々な事柄を共に学ぶことにより、相互理解を深めてそれらを情報発信し、鹿児島ブランドを生み出す人材・地域を育成することを意図している。すでに、技術者グループや経営者グループは、製品を育てた歴史や自然の重要性、あるいは他業種とのメンバーのコラボレーション、サポーター群の育成の重要性に気付いており、これらのことを示唆するような試行がなされ、新規製品として結実した。

本事業の取り組みは採択時のコメントに応えるブランド化を真に見据えた取り組みであり、本事業の成果は拠点形成につながることが期待できる。本拠点形成手法は、鹿児島の地にあって極めて妥当であると評価できる。

(3) 拠点形成の有効性

焼酎を始めとする当地の発酵・醸造製品は、豊かな天然資源を素材として鹿児島の歴史が育てた産業が生み出すものである。鹿児島県の産業構造は製造業の比率が低い弱点があるが、食品産業は比率の低い製造業の中にあってその中核をなすもので、県でも食品産業の育成は重視されている。この産業界に内在する諸問題を解決することは、産学官連携の更なるステップの重要なポイントとなる。

「かごしまルネッサンスアカデミー」はこのような

事情を背景に提案された“人材育成システム”であり、教授内容も明日の職場にすぐに生かせる知識・技能から、将来のビジョンを作成する仕組みまで提供されている。さらに、異なった職場、職域、職種にある者同士による連帯、将来の様々なコラボレーションに取り組む姿勢も本アカデミーの中で養成され、将来の発展につながる人が多いに期待できる。

本事業のように、自治体が重視している地域の産業界が、強く要望する技術・技能を教授・レベルアップし、明日から将来までの様々な課題に対応できる人材を育成することは極めて有効な“地域再生”の手段である。

(4) 実施体制の妥当性

「かごしまルネッサンスアカデミー」は、アカデミー長（鹿児島大学長）をトップとし、アカデミー全体に関する重要事項は、管理会議において決定される。日常業務については、事務的な事項は鹿児島大学産学官連携推進機構管理部門が担当し、教務的な事項については3名のコース長と本事業で採用された専任教員による実務者会議で連絡・調整されている。このように、本アカデミーの管理体制は小回りの利く実務者会議と運営機関である管理会議が有効にかつ機動的に機能している。

教員組織は、すべてのコースで大学内の教員と学外の教員で構成されている。鹿児島の産業、自然、歴史、健康等に関する最新で詳細な知識、技能は主に学内の教員で対応し、一部鹿児島県の職員が教授している。知的財産や経営マネジメント等に関する最新の知識は、学内の教員ではすべてに対応することが困難であり、一部は学外の教員に頼っている。選任にあたっては、科目の内容と教員候補者の経験等を十分に考慮している。鹿児島の醸造を中心とする科学、鹿児島の文化、歴史、自然、環境等いずれを教授するのも最適な実施体制が作られている。

管理体制及び教員体制については、「かごしまルネッサンスアカデミー」を効率よく運営するのに妥当と評価する。

(5) 継続性・発展性の見通し

以上、評価したように、鹿児島県にとって重要な酒造・醸造、食品等の産業に資する様々な人材を育成し輩出することは重要な社会貢献であり、総合大学としての鹿児島大学の地域に対する使命である。「かごし

マルネッサンスアカデミー」そのもの、あるいはこれの発展した組織を継続するためには、本事業に関係する県、酒造組合等の産業界、また学内の諸組織との調整、議論が必要になる。事業の第3年度が始まったこの時期に、将来にも使えるさまざまなカリキュラムや教材、ビデオ教材等が基本的に整備されていることは評価できる。また、すでに将来を検討するための委員会である企画委員会を発足させ、本事業を継続、発展させるための組織づくりやカリキュラム等の議論が始まっていることは評価される。今後、アカデミー長（大学長）のトップマネジメントの下、議論を加速し、早急に「将来構想」をまとめあげることとしている。

8 中間評価結果

中間評価の結果を表13に示した。降旗が指摘するように、かごしまルネッサンスアカデミーは平成18年度に採択された10件の中で、養成人数の多さを特徴とする。これは、他大学において大学院教育プログラムに上乘せする10名程度の養成目標に対して、一般社会人のリカレント教育を主とする教育プログラムである。技術者、経営者のみならず、広く市民に対して対象を広げ、地域再生のためのリーダー等の養成まで養成するものである。

その中間評価が表に示されているとおり、総合評価「B」であった。平成18年度採択事業では総合評価において「A」評価はない。このことは他大学の大学院教育プログラムと同等もしくはそれ以上の成果を上げているということに他ならない。

しかし、課題がないわけではない。今後の進め方において、HECコースカリキュラムはカルチャーセンター的色彩から脱却し、人材養成の実効性を高めるための見直しが必要と指摘された。

更に、進捗状況においても人材の具体的な成果が不明確であること。実施体制の妥当性では、鹿児島県や地元産業界が組織して本プロジェクトに関わる体制の強化が必要であると指摘された。

同時に、拠点形成手法の妥当性では、地域再生を支えるための多様な人材を育成する観点から3コースが設けられ、着実に進められているとし、拠点形成の有効性においても養成された多様な人材のコラボレーションの推進により地域振興の貢献が期待できるとされた。

このため、本事業終了後の継続性・発展性の見通しては、鹿児島県等との連携を強化して具体的に検討を進めることが示された。

これら評価を受けて、HECコースでは、具体的にカルチャーセンター的色彩から如何に脱却させるかが第三期以降のカリキュラム編成の重点課題となった。

表13 中間評価概要

項 目	評価	コメント
総合評価	B	・醸造産業クラスターの構築は地域活性化の面で重要 ・大学と鹿児島県との連携が不十分
今後の進め方	B	・カルチャーセンター的な色彩からの脱し、人材養成の実効性を高めるための見直しが必要
進捗状況	b	・人材養成の具体的な成果が不明確
拠点形成手法の妥当性	c	・地域再生を支えるための多様な人材を育成する観点から3つのコースが設けられ、着実に進められている
拠点形成の有効性	c	・養成された多様な人材のコラボレーションの推進により地域振興への貢献が期待できる
実施体制の妥当性	c	・鹿児島県や地元産業界が組織して本プロジェクトに関わる体制の強化が必要
継続性・発展性の見通し	b	・焼酎学講座、稲盛アカデミー、生涯学習センターをベースに、鹿児島県と産業界と連携しながら、本事業を継続・発展させる具体的な検討が必要

第2章 カリキュラム評価及び中間評価に基づく第三期への改善と修了生の活動支援

1 第三期カリキュラムにおける改善

第二期アンケート評価並びに、中間評価において指摘された視点に基づいて第三期カリキュラムの改善点を3点掲げた。

①コースの教育目標と理念の変更

情報発信を通じた地域再生を担う人材養成であることを明確にする。

②コースの教育目的の変更

教育目標と理念の変更に伴い、修了課題により重点を持たせ、それに合わせて従来の5つの教育目標を3つに整理統合する。

具体的には、従来の「地域再生論」をそのまま残し、

「①地域を再生する必要性と方向性の理解」へ、一方、従来の「産業、文化・歴史、環境、健康」はまとめて「②焼酎・発酵産業を支えてきた風土や歴史、文化や技術の理解」へ。さらに、情報発信スキルは「事業提案能力の習得」を新たに加え③に統合する。

③必修クラスの厳選と開講順序の工夫

開講科目を「知識のINPUT」と「知識のOUTPUT」に分ける。

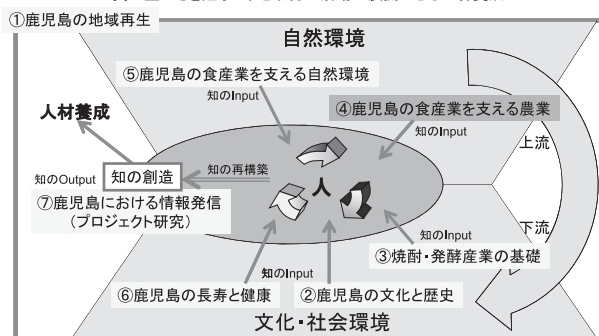
知識のINPUT科目においては、科目オリエンテーション（概論Ⅱ）が科目を総括するように内容を修正し、知識のOUTPUTに連結していくよう開講時期および順序に配慮する。

特に、中間評価における指摘としてカルチャーセンターの色彩からの脱却を目指すにあたり、個々人の趣味の領域から脱却してもらうための仕掛けとして、講義・実習の流れを明確にするとともに、情報発信の重点化を図ることにした。具体的には、「知のInput」「知のOutput」科目を明確にし、グループにおける修了課題研究に他の講義実習と受講者のこれまで蓄積してきた知識と経験が活かされるように配慮することであった。

このため、経営管理コースでもプロジェクト研究に取り組んでおり、コース連携を図って情報発信スキルの向上に当たることにした。

図39 中間評価におけるカリキュラムの改善図

鹿児島県の環境保全と経済を両立させ、世代を超えて真の豊かさを追求し、地域再生活動の展開できる人材養成



2 修了生への活動支援

ここでは第二期生の修了後の活動実績（2008年9月～2009年3月）について紹介する。

6グループ中4グループが修了後も活動を継続した。特に、修了課題発表会：4月23日以降の活動について示す。

(1) Ogojo Ship：グリーンツーリズム（親子関係を振り返る農業体験）

- 2008年9月1日 鹿児島大学生涯学習教育研究センター公開講座・発表打ち合わせ
- 2008年9月7日 鹿児島大学生涯学習教育研究センター公開講座にて事例発表
- 2008年9月20日 今後の活動打ち合わせ
- 2008年10月23日 薩摩川内での実践打ち合わせ
- 2008年10月25日 薩摩川内での実践①ステビア堆肥利用有機栽培水稻の稲刈り
- 2008年11月1日 ルネッサンスアカデミー第三期講義「修了生の声」報告
- 2008年12月21日 薩摩川内での実践①海連まつり参加（中止）
- 2009年1月 今後の活動打ち合わせ（Mail）
- 2009年2月5日 学長へ成果報告

(2) さつま Foodn' 5：食育領域（桜島大根の栽培体験）

- 2008年8月29日 鹿児島大学生涯学習教育研究センター公開講座・発表打ち合わせ
- 2008年8月30日 鹿児島大学生涯学習教育研究センター公開講座にて事例発表
- 2008年9月2日 今後の活動打ち合わせ
- 2008年9月14日 桜島での実践①桜島大根の種まき
- 2008年9月28日 桜島での実践②桜島大根の間引き
- 2008年10月13日 桜島での実践③桜島大根の間引き
- 2008年10月26日 桜島での実践④桜島大根の間引き
- 2008年11月1日 ルネッサンスアカデミー第三期講義「修了生の声」報告
- 2008年11月16日 霧島食の文化祭事例報告
- 2008年11月30日 桜島での実践⑤桜島大根の追肥・土寄せ
- 2008年12月21日 桜島での実践⑥桜島大根の追肥・土寄せ
- 2009年1月17日 桜島大根試食会⑦
- 2009年2月1日 桜島での実践⑧桜島大根の管理・収穫カンパチ・ブリ大根まつり参加
- 2009年2月5日 学長へ成果報告及び桜島大根贈呈
- 2009年2月22日 桜島での実践⑨桜島大根の管理・収穫
- 2009年3月21～22日 鹿児島中央駅での実践⑩（九

州新幹線開通記念イベント参加)
桜島大根を使った企画（干し大根づくり等）

(3) 食のルネッサンス：食育領域（伝統食の継承）

⇒サークル「緑の木と食を育む自然の会」として活動

2008年 8月30日 鹿児島大学生涯学習教育研究センター公開講座にて事例発表
2008年 10月29日 鴨池公民館にて伝統食をとおした料理教室①（昼間）
2008年 10月30日 ルネッサンスアカデミー第三期講義「修了生の声」打ち合せ
2008年 10月30日 鴨池公民館にて伝統食をとおした料理教室②（夜間）
鹿児島大学留学生参加
2008年 10月31日 ルネッサンスアカデミー第三期講義「修了生の声」打ち合せ
2008年 11月 1日 ルネッサンスアカデミー第三期講義「修了生の声」報告
2008年 11月16日 霧島食の文化祭参加
2008年 11月26日 鴨池公民館にて伝統食をとおした料理教室③（昼間）
2008年 12月 4日 鴨池公民館にて伝統食をとおした料理教室④（夜間）
鹿児島大学留学生参加
2009年 1月20日 鴨池公民館にて伝統食をとおした料理教室⑤（昼間）
2009年 2月 5日 学長へ成果報告
2009年 2月17日 鴨池公民館にて伝統食をとおした料理教室⑥（夜間）
2009年 3月25日 鴨池公民館にて伝統食をとおした料理教室⑦（昼間）

(4) かごしまプロジェクトX'：ツーリズム領域（郡山地域をフィールドとした地域交流）

2008年 9月 2日 鹿児島大学生涯学習教育研究センター公開講座・発表打合①
2008年 9月 4日 鹿児島大学生涯学習教育研究センター公開講座・発表打合②
2008年 9月 7日 鹿児島大学生涯学習教育研究センター公開講座にて事例発表
2008年 9月23日 郡山での実践①蟻の花尾詣（花尾神社祭り：丹後局役で参加）

2008年 10月21日 今後の活動打ち合わせ
2008年 10月30日 ルネッサンスアカデミー第三期講義「修了生の声」打ち合せ
2008年 10月31日 ルネッサンスアカデミー第三期講義「修了生の声」打ち合せ
2008年 11月 1日 ルネッサンスアカデミー第三期講義「修了生の声」報告
2008年 12月 6日 郡山での実践②しめ縄づくり
2009年 2月 5日 学長へ成果報告
2009年 2月22日 郡山での実践③座禅会
なお、かごしまプロジェクトX'は健康・環境・文化コースの第一期生と連携して実践を継続しているグループである。

終章 今後の課題と展望

鹿児島大学かごしまルネッサンスアカデミーは、社会人のリカレント教育を通して地域再生の人材養成を行うプログラムである。この特徴としては、大学が正規の学生に提供する学部や大学院教育とも、また、大学開放の視点から学習機会を提供する公開授業や公開講座とも異なる新しい目的と内容をもつ。

当アカデミーが提供する3つのコースのうち、「食の安全管理コース」は、現役技術者の再教育を目的とし、「経営管理コース」についても、現役の経営者のスキル向上を目的とするものである。これらの目的に比べ、健康環境文化コースは、受講希望者の専門性を特定しないのみならず、事前の知識や経験が問われない市民が、その熱意や関心を唯一の条件として1年間の教育プログラムを受講することになる。その狙いは、焼酎発酵を中心とした食産業と食文化の振興は、技術者や経営者の努力によってのみ達成されるのではなく、より消費者の立場に近い層の理解と努力が底支えをするという理念に基づく。すなわち、消費者により近い立場にあるものが、焼酎発酵産業に関わる基本知識はもとより、鹿児島という自然・風土によって育まれてきた食文化の意味と価値を悟り、各々の持ち場（生活の場や職場）において、その現代的価値を発信していく行動力を身につけることに目標が設定されている。

当コースは、アカデミーの設立当初より、高い見識と教養を身につけることが、アウトウトプットとしての情報発信力と同等の位置づけが与えられている。「食の安全管理コース」と「経営管理コース」の修了要件として、健康環

境文化コースが提供する科目の一部を習得することが定められているのも、技術者や経営者においても、高い見識と教養を身につけることが必要条件だという問題意識に立つ。その問題意識の背景には、地域社会の真の再生は、経済的尺度によってのみ評価しうるのではなく、健康、環境、文化など人が豊かに生きていける条件を総合的に高められているかどうかにかかっているとの考えがある。地域再生のための人材養成に大学が携わる価値もこの点にあると考えるべきであろう。

一方、中間評価では、当コースが、カルチャーセンター的色彩から脱却できていないのではないかと指摘を受けた。評価者が、「カルチャーセンター的色彩」をどのような意味として用いているのか定かではないが、憶測するには、個々人の趣味・おけいこごとの範囲にとどまっているということを指摘したかったのではないか。確かに、大学がすでに実用する学習機会の提供システムとしての公開授業や公開講座は、各自の人生を豊かにするべく、各自の興味関心を充足させるにとどまる場合が多く、趣味の範囲を超えていない場合も当然ある。それ自体は、否定されるべきものではないが、現在当コースが抱えるミッションは、各自のなかで学習した内容を自己完結することを最終目的にしていない。学習した内容について、地域の再生、ないし、地域社会の発展にどう還元していけるのかが問われているのである。

中間評価は、かごしまルネッサンスアカデミーが事業を開始し、1年半の実績で評価されたものである。そして、中間評価で受けた「カルチャーセンター的色彩からの脱却」という課題は、我々が第一期の課題を分析する中で認識した課題の一つと一致するものである。すでにその反省に基づき、第二期カリキュラムに改善を加え、実施段階において、改めて文部科学省の事業評価で同様の指摘を受けることになった。人材を養成する立場からみて本事業の難しさは、30名という一定の人数を修了させるという命題と、実際に地域において主体的な行動がとれる知識やスキルを身につけるという命題が、往々にして反し合うということだ。学部や大学院といった修了資格が明確で、しかも強制力を有するプログラムと異なり、原則無料で提供している当事業に強制力はない。あくまでも、プログラムを提供する側と受講する側の相互の了解に基づいて本事業は成立する。したがって、双方のミッションの共有に始まり、提供する場合や方法等について、手探りで互いに納得する地点を探り当てていく過程を要求する。ここに本事業の新しさと挑

戦があるといえるだろう。

すでに本事業は、第三期を終えて、第四期を迎えている。その後の報告については、また別の機会にゆだねることにしたいが、かごしまルネッサンスアカデミーは、大学と地域における一つの社会実験であるといえる。その実験が意味あるものになるためには、現状に満足することなく、次のような問いを立てながら、実践と検証を重ねるしかないと考えている。その問いとは、地域再生とは何であり、その実現に必要な能力や力量とはいかなるものか。また、それを支援する教育プログラムはどのような内容や方法を持ち合わせなければならないのか、である。このことは、大学だけで成し遂げられるものではなく、受講生はもちろんのこと、広く地域社会と対話するなかで見えてくるものではないのか。一方で、委託費を受けている立場としての説明責任が求められるが、真の地域再生に向けて今後とも試行錯誤を続けていきたい。

引用・参考文献

- ・鹿児島大学 「科学技術振興調整費 地域再生人材創出拠点の形成 かごしまルネッサンスアカデミー」
平成18年度 科学技術総合研究委託費
委託業務成果報告書
- ・鹿児島大学 「科学技術振興調整費 地域再生人材創出拠点の形成 かごしまルネッサンスアカデミー」
平成19年度 科学技術総合研究委託費
委託業務成果報告書
- ・鹿児島大学 「かごしまルネッサンスアカデミー」
地域再生人材創出拠点の形成 中間評価
平成20年
- ・降旗信一・小栗有子 「鹿児島大学かごしまルネッサンスアカデミー・健康環境文化コース（第一期）における社会人リカレント教育カリキュラムの開発と評価」 鹿児島大学生涯学習教育研究センター年報 第5号 2008年